5 熊本県医師修学資金貸与制度

1.地域医療ゼミ

Ⅰ 概要

地域枠学生等（熊本県医師修学資金貸与学生）に対し、地域医療に関する様々なテーマで毎月1回ゼミを開催しました。

熊本県知医師修学資金貸与学生は48人おり、各学年の人数は右の表のとおりです。

昨年度から開始した「インタレストグループ」を今年度も継続し、「臨床推論」「シネメデュケーション」「キャリアと制度」のテーマを設定し、学生個人が興味のあるテーマを選び、事前に取り組む内容を決めて地域医療ゼミの当日にプレゼンするという形式でゼミを開催しました。

1年生	6人
2年生	6人
3年生	8人
4年生	9人
5年生	9人
6年生	10人

Ⅱ 活動報告

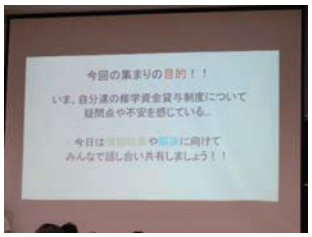
0 2018年3月23日、前年度最後の地域医療ゼミが行われました。
小国公立病院総合診療・循環器科の片岡恵一郎先生を講師に迎え、小国町での地域医療についてご講演いただきました。

その後、次年度のゼミ代表のあいさつがあり、レクリエーション、翌年度のゼミ活動グループ分けの話し合いへと進み、翌年度のゼミが楽しみとなるような地域医療ゼミとなりました。

1　2018年4月19日、本年度最初の地域医療ゼミが開催されました。
谷口先生から地域医療ゼミの説明や、新入生の自己紹介、年間スケジュールの確認などをしたのち、懇親会を行いました。

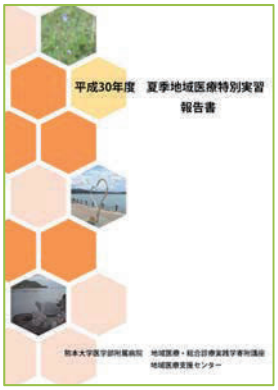
2　2018年5月28日、本年度2回目の地域医療ゼミは、平成30年度キャリア支援セミナー「医療メディエーション」への参加として行われました。（セミナーについてはP.23をご参照ください。）

3　2018年6月21日、本年度3回目の地域医療ゼミが行われました。
「キャリアと制度」をテーマにワールドカフェ形式でディスカッションを行いました。医師就学資金貸与に対する不安や疑問を洗い出すことができました。



4　2018年7月19日、本年度4回目の地域医療ゼミが行われました。
翌月行われる夏季地域医療実習について、事務からは日程の説明を、髙柳先生からは実習の事前課題についての説明を、また、5年生からは実習地となる水俣市・芦北町・津奈木町についてのスライドを用いての説明がありました。

5　2018年8月16日から18日にかけて、水俣・芦北地域で平成30年度夏季地域医療実習が行われました。詳しくはP.60をご覧ください。
（さらに詳細な内容は、別冊の『平成30年度夏季地域医療特別実習活動報告書』をご覧ください。）



6

2018年9月29日、本年度5回目の地域医療ゼミは、メンターメンティ情報交換会「キャリアや子育てについて気軽に相談してみよう」への参加として行われました。
（セミナーについてはP.23をご参照ください。）

7

2018年10月18日、本年度6回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回のインタレストグループのテーマは「プロフェッショナリズム」です。
映画「100歳の少年と12通の手紙」を題材としたシネメデュケ―ションを行いました。映画を通して、患者が求めているように向き合うことの難しさについて考え、グループディスカッションを行いました。

8

2018年11月22日、本年度7回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回のインタレストグループのテーマは「臨床推論」です。5年生を中心に低学年へ向けて臨床推論のやり方をレクチャーし、実際に症例をもとに臨床推論を行いました。

9

2018年12月20日、本年度8回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回のインタレストグループのテーマは「プロフェッショナリズム」です。
映画「パッチ・アダムス」を題材としたシネメデュケ―ションを行いました。映画を通して、患者を笑顔にする医療とは何かについて考え、グループディスカッションを行いました。

10

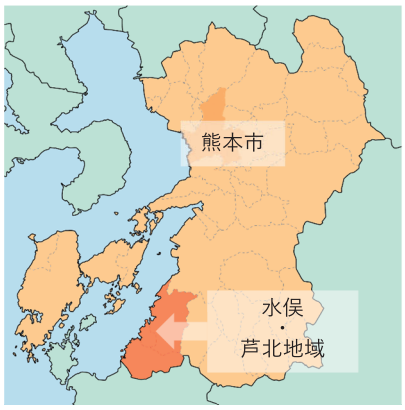
2019年1月12日、本年度9回目の地域医療ゼミは、医学生・研修医をサポートするための会によるセミナー「妊婦体験を通して働き方を考えてみよう」への参加として行われました。
（セミナーについてはP.24をご参照ください。）

11

2019年2月21日、本年度10回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回のインタレストグループのテーマは「キャリアと制度」です。
はじめに、熊本県庁医療政策課の医師修学資金貸与制度担当者から、制度について改めて説明がありました。質疑応答では、高学年から今後のキャリアに関する質問などがありました。自身のキャリアを考える良い機会となりました。

2.平成30年度夏季地域医療特別実習

Ⅰ 概要



熊本大学医学部では、平成30年度より熊本市外の病院で実習を行う地域医療のクリニカルクラークシップ（3週間）が必修となり、地域での臨床に即した学びの機会は比較的あるようになりました。しかし、広く地域を俯瞰してみる視点やその地域を医療保健分野のみならず多方面からみる視点を学ぶ機会は少ないのが現状です。

そこで学生の間に地域について知ることは将来地域で従事する際にも有益と考え、昨年より地域を知るという観点に重点を置いた実習にデザインを変更しました。

水俣・芦北地域は、公害病である水俣病が発生した地域として国際的にもよく知られています。現在も水俣・芦北地域においては、公害病に関連した課題を抱えています。

それらの課題に対して、公私・職種の垣根を超え、多くの分野で取り組みが行われており、今後も継続的な取り組みが必要とされています。現在、熊本大学医学部医学科においても、水俣病に関連した学習はごく限られた内容のみであり、学生にとって水俣病患者の現状や、公害病に関連した様々な取り組みに関しても知る機会は多くありません。

将来熊本県内の地域で医療に従事する医師修学資金貸与学生や自治医科大学の学生において、水俣・芦北地域での実習を通して、この地域について理解を深めることは意義深いことと考え、今回の実習を計画しました。

◆ 実習の目標

1）水俣・芦北地域の専門職・住民と交流する

2）水俣芦北地域について様々な視点から深く知り説明できる

（1）水俣病という視点

（2）地域包括ケアという視点

（3）その他

3）水俣芦北地域の課題について解決・改善策について検討し発表する

4）実習を通して将来熊本県の医療を支える学生間の交流を深める

5）地域で求められる医師像について実習の経験をもとに考察し、レポートを提出する

◆ 実習参加者

➢ 熊本県医師修学資金貸与制度利用学生

- 熊本大学生　20名
- 鹿児島大学生　1名

➢ 自治医科大学医学部熊本県出身者　9名

Ⅱ 実習の大まかな流れ

◆ 事前課題を配布

✓ 主にインターネット上で取得できる情報をもとにステップ形式で地域診断を行う

①講演会・資料館見学

✓ 水俣病資料館の見学や水俣病に関する講演を聞き、水俣病について学ぶ

②フィールドワーク

✓ 実際の現地でどのような問題と向き合っているか、医師以外の職種からも話を聞く

✓ 観光名所を訪ね、多角的な視点から地域を知る

③グループワーク

✓ 各自が個別に調べてきた内容や講演会・資料館見学、フィールドワークを通して地域の問題についてディスカッションし、スライドにまとめる

④全体発表

✓ 事前学習・グループワーク・フィールドワークを通して地域の問題について考察

✓ それに対する対応策や解決策についてアイディアを発表（発表内容を教員・外部講師・関係者が評価票で評価）

Ⅳ 3日間の日程

8/16(木)

AM
- 集合
- 移動
- 水俣病資料館見学
- 語り部講話

PM
- 水俣についての講話
- 外部講師セッション①

8/17(金)

AM
- フィールドワーク

PM
- フィールドワーク
- グループワーク
- 懇親会

8/18(土)

AM
- グループ発表
- 講話
- 外部講師セッション②

PM
- 移動
- 解散

詳細は
平成30年度
夏季実習報告書
をご覧ください。

講話について

水俣病問題について
水俣病保健課主事　鹿瀬島　大成　氏
公害健康被害補償法に基づく水俣病認定について
水俣病審査課主幹　那須　豊　氏
水俣・芦北地域振興計画について
県南広域本部芦北地域振興局保健福祉環境部部長　川浪　誠　氏
水俣病の治療研究の現状
国立水俣病総合研究センター 臨床部長　中村　政明　氏
環境モデル都市みなまたの取り組みについて
水俣市環境課長　柿本　英行　氏
鹿児島大学　離島・地域医療実習
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科地域医療学分野教授　大脇　哲洋氏

フィールドワーク

1班　水俣Aエリア（水俣病関係施設・湯の児）
水俣保健所，小規模多機能事業所「ほっとはうす」，生活共同援助施設「おるげ・のあ」，重症心身障害児（者）施設「明水園」
2班　水俣Bエリア（母子保健）
児童養護施設「光明童園」病児・病後児保育「もくれん」児童発達支援センター「にこにこ」，保健センター，水俣市立総合医療センター
3班　水俣Cエリア（中山間地域の医療・介護）
越小場まちかど健康塾，水俣市立総合医療センター 附属久木野診療所（へき地診療所），久木野ふるさとセンター「愛林館」，小規模多機能型居宅介護施設「くぎのの里」
4班　水俣Dエリア（救急医療・介護保険全般）
水俣消防本部，広域行政事務組合（介護認定機関），いきいき健康課・社会福祉協議会，岡部病院
5班　水俣Eエリア（地域の中核病院・医療と介護の連携）
在宅医療・介護連携支援センター（医師会内），特別養護老人ホーム「白梅の杜」，水俣市立総合医療センター
6班　芦北Aエリア（山間地の医療・介護）
芦北町役場，通所介護事業所「吉尾デイサービスセンター」，美里在宅支援事業所「NPO法人みさと」，竹本医院，「きずなの里」（社会福祉協議会）
7班　芦北Bエリア（沿岸部の医療・介護）
芦北町役場，認知症対応型共同生活介護事業所「紫おん福祉の家」，百崎医院，「きずなの里」（地域包括支援センター）
8班　津奈木エリア
津奈木町役場，津奈木町社会福祉協議会，平国コミュニティセンター「たっしゃか塾」，特別養護老人ホーム「あけぼの苑」

3.平成30年度卒業生

- 田中　祥平
- 古島　京佳
- 松尾　淳一
- 蓑田　美喜子
- 森口　直哉
- 井村　昭彦
- 奥村　祐生
- 小泉　大海
- 中田　浩介
- 山口　裕介

■ 田中　祥平

6年間を振り返って

随分ざっくりとした題の文章である。我らがコーディネーターから「テーマは何でも結構」との旨のメールだったのでこんな題でも勘弁してほしい。丁寧に１年ごとの思いを綴ると800字を6で割って１年あたり133字になるのでここは素直に僕が地域枠の学生として過ごした中で良かったこと、地域枠に感謝したいことを述べようと思う。

まず、熊本大学医学部医学科に入学させていただいたこと。二次試験を受ければ落ちていたであろう僕を地域枠推薦入学の希望者の中から選んでいただいた。定員５名に応募８人。このぐらいのハードルでなければ、熊高、壺渓塾等々の猛者が集う熊本大学医学部の門をくぐれなかった。今こうして国家試験に臨むために勉強することもできなかっただろう。地域枠様々、ひいては地域医療が注目されるに至った日本の医師偏在と高齢化様々、かもしれない。

２つ目、他のメンバーも言及しているだろうが、月１回の地域医療ゼミと夏季合宿で地域医療の何たるかを勉強させてもらったこと。大学という最先端の医学・医療を担う場では、カリキュラムとして医学生が地域医療について学ぶ場はほとんどなかった。学生みんなで集まって地域医療について考えるゼミと、実際に地域に出向いて地域医療の最前線を肌で感じる夏季合宿は他の医学生にはない財産の一つであると思う。国の医療の状況が変化し、専門医制度として総合診療科が作られた変化の中で、その実態をおぼろげながら学べたのはとてもよかった。少なくとも総合診療に対する「検査でわかるのに時間かけて問診するとか馬鹿らしいよね」とか「経験的な診断学はAIに置き換わるから将来潰れる科だよ」という意見に対して、それは違うんじゃないかと思えるようになった。

この感謝を熊本の医療に還元できるように、何となく見えてきた医療の暗いところにも負けないようにこれからも精進しようと思う。

地域医療・総合診療実践学寄付講座の先生方、スタッフの皆様、６年間ありがとうございました。そして、今後ともよろしくお願い致します。

■ 古島　京佳

早いものでもう６年生となり、無事卒業も決まり、国家試験があとひと月と差し迫っている今、これを執筆しております。

６年間を振り返るとやはり、夏季実習が最も印象的でした。１年時、まだ医学について学んでいることはほとんどなかったのですが、天草地域医療センターでの手術見学で設備がしっかりしている手術室を見て地域医療に対して持っていた誤ったイメージが消え去りました。それ以上にまた私の疑問にたくさん答えてくださった先生方にも感謝しています。

また、３年時の玉名地域での夏季実習では開業されているクリニックでの実習を行いました。標榜している診療科にこだわらず様々な疾患を診たり、その患者さんのみならず家庭や親族の状況を把握していらっしゃる先生の姿を見て、大変感銘を受けました。▸▸

私も患者さん側の立場だったらあのような先生がかかりつけ医であってほしいし、自分自身もあのような医師になりたいと考えました。
　地域医療ゼミで積極的に活動したとは言えない私ですが、数少ない活動のなかでもたくさんの経験ができ、それがきっかけとなりクリニカルクラークシップでも菊池郡市医師会立病院にて３週間の実習を行いました。ここでは中核病院と保健所、クリニックとの連携などを学びました。
もしこのゼミがなかったら私は地域医療について何も知らず六年間を過ごし、目標や理想もわからないまま実際に働くことになっていたのかと思うと少し恐ろしさまであり、本当に感謝しております。今、国家試験に向けた公衆衛生の勉強をする中で、実習で実際に見てよかった思うことが多々あり、その点でもありがたく思います。
　６年間大変お世話になりました。国家試験に合格しさえすればようやくこれからが本番です。今後もご指導ご鞭撻、ご支援のほどどうかよろしくお願いいたします。

■ 松尾　淳一

国試前にふと思うこと
　今この文章を書いているのはまさに113回医師国家試験まであと1ヶ月を切ったところで、いよいよこの時がやってきたかという気持ちがしている。同級生もみな朝から晩まで勉強部屋にて直前の追い込み勉強に励んでいる。6年生のクリクラ実習、卒業試験が終わった10月以降はこれといった学校行事もなく、あとは国試対策という形になるので曜日感覚は完全に失われ、もはや大学生活最大の休み期間なのではないかと錯覚しまうこともしばしばあった。国家試験の勉強は自身のメンタルとの勝負であるが、勉強部屋のメンバーの仲が良く和気藹々としており、自分自身も医学の勉強が好きであることが幸いしてむしろエンジョイできている。
　今になって思うのが、6年生になってようやく医学という学問の全体像がぼんやりと把握できるようになった。低学年のころは生化学や生理学、解剖学、組織学、病理学と目の前にある試験に追われ、訳も分からずとりあえずテストのために覚えるということに必死だった。断片的な知識はあるが、それが医学という学問においてどういう意味を持っているのかというところまでは知る由もなかった。これが高学年になって臨床の勉強を始めると、それぞれの分野が全体像のどこに位置し、なにを意味するのかなんとなくだが分かるようになってきた。低学年で学んだ基礎医学すべてが医学という壮大な絵のパズルのピースになっていると気づいたときの衝撃は非常に大きかった。このころから医学の勉強がただの暗記ではなくなりとても楽しくなったような気がする。大学生活も終わりに近づくと将来のことも考えるが、自分が新たなパズルのピースを作るのに向いているのか、すでにあるピースを駆使するほうが向いているのか自分でもわからないしどちらに興味があるのかもまだわからない。どの分野に進むのかはこれから研修を通してゆっくり考えたいが、どの道に進むにしても初心と感謝の気持ちを忘れず、周りに恩返しができる医師になりたいと思う。

■ 蓑田　美喜子

　卒業にあたり学生生活を振り返ってみると、この６年間は本当にあっという間でした。勉強に部活にと打ち込み、充実した毎日を送っているうちにいつの間にか６年生になっていました。この６年間で、いろんな場所に行き、多くの人と出会い、様々な経験をすることができました。そしてこの春、無事に卒業することができます。これまで、金銭面での不安を感じることなく大学生活を送ることができたのも、医師修学資金制度のおかげです。
　また地域枠の活動を通して、地域医療に関して非常に多くのことを勉強させていただきました。その中でも印象に残っているのが、夏季実習です。地域で働く医師の姿をみることはもちろん、コメディカルの方々との意見交換やフィールドワークなどがとても貴重な経験になりました。大学の実習では、病院内からの視点でしか医療を考える機会がなかったので、様々な職種の方々からお話を聞いて初めて知ることがたくさんありました。医師として働くうえでは、知識や技術、コミュニケーション能力だけでなく、様々な視点から医療を考える力も必要なのだと感じ、これからさらに勉強していこうと思いました。
　毎月の地域医療ゼミでは、臨床推論や医療がテーマの映画の鑑賞など、低学年の頃から医療を身近に感じられる内容で、とても楽しく参加させていただきました。学年が上がってからは自分たちが後輩に教える側になり、分かりやすく伝えるのがどれだけ難しいのか実感したのも良い経験となりました。▸▸

また、女性医師のキャリアやワークライフバランスについての講演会なども、これからの自分の医師人生を考える上でとても参考になりました。
　４月からは初期研修医として県内の病院で働き始めます。この６年間で学んだことを活かし、少しでも熊本の地域医療に貢献できるよう、日々精進していきたいと思います。
　最後になりましたが、これまで指導してくださった地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、スタッフの皆様には６年間大変お世話になりました。ありがとうございました。

■ 森口　直哉

　自分にとってはついこの間大学生になったような気分ではありますが、早いものでもう６年の月日が過ぎ、卒業の時期を迎えました。６年間を振り返るとなんでもかんでも書くことがありそうだと思っていましたが、意外と記憶というのは曖昧なもので、下級生の頃の思い出もそこまで溢れるように出てくるものではありません。自分が部活動やアルバイトなど大学生らしい活動にあまり積極的ではなかったことも原因の一つなのでしょう。そのような生活を送っていた私にとって、この寄付講座や地域医療ゼミというのは唯一の大きな交流の場、イベントだったと思っています。そこで私は６年間を振り返ってみて、地域医療枠として入学して良かったと感じたことを綴っていこうと思います。
　私は将来、自分の出身地である天草で医師として働きたいと思い大学を受験しました。地域で働くつもりだったので地域枠推薦を受けることに抵抗はなかったです。他の学生との一番の違いというと卒業後に熊本の地域医療に携わらなければいけないということですが、それはあくまで卒業後医師になってからのお話なので、在学中は特に他の学生との違いを感じることはないだろうと思っていました。しかし驚いたのは、普通に受験をして入学した同級生の中に、地域の病院で働きたいと言っている人がほとんどいなかったことです。全くいなかったわけではないですが。私もただ漠然と天草で医師をしようと考えて入学しただけだったのですが、６年間のゼミを通して熊本の地域医療の現状、地域に求められる医師像など、地域医療というものについて多くのことを学ぶことができました。それを詳細に述べることはしませんが、もし私も地域医療枠としてではなく一般受験生として入学していたら、入学当時の漠然としたイメージのまま天草で医師をしようとしていたか、あるいは地域医療そのものに対する関心が薄れていたかもしれません。それも一つの道だとは思いますが、自分が入学当時からぶれることなく地域医療に従事したいという考えを持てたのは、地域医療枠のおかげだと感じています。

■ 井村　昭彦

　もうすぐ長かった学生生活も終わりを迎えようとしています。入学してから色々なことがありました。私は3年生の後半からこの地域枠に参加しました。熊本県の地域医療に関わっていきたいということは入学前から考えていたことでしたが、地域枠の入学ではなくても参加できるということを入学後に知りました。参加したころは、医師になった後の生活については実際のところはあまり知りませんでした。しかし、地域医療支援機構の集まりや夏休みの合宿などへ参加することで、どのようなことが求められているのかを少しずつ学ぶことができました。熊本県は全国平均と比べて医師が多い県ですが、医師の偏在によりやはり医師が不足している地域も多くあることがわかりました。特に天草に合宿に行った際に、天草の地域の人口や産業、病院を調べていくなかで、医師が足りていない地域は本当に足りていないことが分かりました。私は河浦病院に行く機会がありましたが、そこに勤務している医者は本当に大変そうでした。このような地域にどのように医師を派遣していくのかは難しい問題だと思います。実際に進んで行きたい人がいればいいのでしょうが、自分の将来のキャリアや家族などとの兼ね合いなども出てくると思います。また、あまりに大変だと、自分の健康問題とも関わってくると思います。また、国や自治体の予算の問題もあるかと思います。解決しなくてはいけないことは多い問題とは思いますが、この地域の医師不足の問題に、医師になった後に関わっていくための、心の準備が色々な会に参加したことによりできたように思います。
　国家試験を直前に控え、合格した後のことを考えるのは都合がいい気がしてあまり先のことは考えずに試験勉強をしている毎日ですが、医師になった後には色々解決しなくてはならないこの問題に少しでもプラスになるような働きができるよう、関わっていきたいと思います。研修医になっても、将来自分が進む診療科と、地域医療との兼ね合いを考えて、自分の進む道を決めて行こうと思います。

■ 奥村　祐生

６年間を振り返って

私は、熊本県出身です。将来は生まれ育った熊本の地で医師となり、地域の役に立ちたいという思いで地域医療に従事する決意をしました。しかしながら、熊本市内で生まれ育ったため市外の地域でどのような医療が行われているは全く知りませんでした。

地域医療ゼミでは、実際に地域を訪れ、実情を身をもって経験することができます。
このゼミに参加して初めて参加した夏季地域医療実習では、阿蘇を訪れ、講義や実習を通じて地域医療が何たるかを学びました。ドライブなどでしか訪れたことしかなかった地域でしたが、住民の方々との交流を通じてこれまで考えたこともなかった角度からの視点で地域を見ることができました。部外者として身勝手な視点で捉えていたことを反省すると同時に、今後医療者としてどのように地域と関わっていくかを初めて考える機会となりました。

天草での夏季実習では、医療連携に重要な役割を果たす行政や福祉など病院以外の施設を見学し、地域医療の心強さと難しさの両面を感じることができました。多くの職業の方々が地域を支えている中で、医師の役割は何なのかを考える機会になりました。決して病気と向き合うだけではなく、住民の方々や行政、時には制度そのものとも向き合うことが求められています。

先生方が学生のために工夫して考えてくださった実習のすべては、様々な視点からの物事の捉え方を示してくださり、入学当時と比べて大きく視野を広げることができました。

地域では、市内の大きな病院とは異なる患者さんとの距離感や、地域独特の病院の役割があります。確かにより多くの知識と人間性が求められ、期待も責任も大きく大変かもしれません。しかし今では、これが昔から自分が思い描いていた「医師の理想像」に一番近いと感じています。これからどんなキャリアを積んでいくかわかりませんが、この6年間を通じて学ばせてももらった恩返しができるように頑張っていきたいと思います。

本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 小泉　大海

入学当初の6年前の春には想像もできなったが、いよいよ熊本大学医学部医学科を卒業しようとしている。自分自身は2度目の大学入学ということもあり、他の人よりも大学というものの勝手を知っていたつもりであったが、医学部は他学部とは様々な面で異なっており、特に学業の面ではカリキュラムについていくのに必死だった思い出しかないのが率直な感想である。一方で、その他の面では良い友人達にも恵まれ、部活に励み、以前から興味のあった研究活動にも触れることができ、なかなか充実した大学生活を過ごすことができたように思う。

そのような中で、本来の目的である医師になるということについては、実のところ最初の１、２年間はほとんど実感が湧かない状態で、本当に医師になれるのか、また、なったとしても果たして自分に何ができるのかなど、少なからず葛藤した日々を送ったことも事実であった。しかしながら、基礎・臨床の授業を受け、様々な実習を経験していく中で、徐々にではあるが、自分が医師として働く姿をイメージできるようになり、最終的に、自分なりに医師となって患者さんのために尽くそうと決意できるまでになったのは、節目節目で励ましのお言葉を頂き、指導して頂いた先生方を始め、沢山のサポートをしていただいた周りの方々のおかげであり、また生活の支えとなった熊本県医師修学資金のおかげであることは言うまでもない。そのようなご恩に報いるためにも、卒業後は医師として熊本県の地域に根付き、患者さんやそのご家族を支える存在として、社会に少しでも貢献しなければならない。そのためには単に医師になることで満足せず、ここからが始まりだと肝に銘じ、今まで以上に研鑽を積むことを怠らないようにしていかねばならないと思う。

6年間本当にありがとうございました。

■ 中田　浩介

入学当初は遠い存在であった6年生にいつの間にか自分も進級し、数か月後には卒業が控えていると思うと、熊本大学での6年間は密度の濃いあっという間の時間でした。今回で2度目の大学生活なのですが、皆が同じ目標に向かい切磋琢磨する医学部の特殊な環境はとても刺激を受けました。

この6年間では様々なことを学んできましたが、特に印象に残っているのは、医学を学ぶものとして初めて“人体”と向き合う実習となった解剖実習でした。ヒトの体の構造について学べる喜びと同時に、貴重な経験を積むことができたことへの感謝の気持ちで満たされました。様々な形で多くの方の支えが、私たちが医師となるうえで存在しているという事に気付かされ、そういった思いを胸に医師として働かなければならないと痛感した実習となりました。

また、夏季実習やクリニカルクラークシップで選択した地域医療実習も特別なものとなりました。今振り返ってみますと、地域で従事することへの思いが変化する良いキッカケになりました。実際に各地域の医療の現場を目の当たりにすることで、紙面やデータだけでは分からない実情が見えてきました。医療従事者だけでなく住民の方々とも交流することができ、将来働くうえで参考となるお話も多くあり実りある実習となりました。

（順調にいけば）４月から初期研修医として、医療に従事することとなります。医師としてのスタートラインに立ったばかりで、まだ何も力になれませんが、少しでも早く熊本の医療に貢献できるよう精一杯努力する所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、松井教授をはじめ熊本大学医学部附属病院地域医療支援センターの皆様、お世話になりました関係各所の皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

■ 山口　裕介

800字も書くことが思い浮かばないのですが、熊本県医師修学資金を借りてよかったことと悪かったことを書きたいと思います。

まず夏季実習がよかったです。いろんな地域のことを知ることができ、1～3年では短いながらも病院での実習をさせていただきました。また、自治医科大学の友人ができたことも非常に嬉しいことでした。

主に夏季実習のおかげだと思いますが、地域医療への興味が持てたこともよかったです。クリクラで地域医療を2ターム選びましたが、奨学金を借りていなければ1タームも選ばなかったと思います。

クリクラでは、人吉医療センターと小国公立病院にそれぞれ3週間ずつお世話になりました。どちらも大学での実習では学べないことを多く学ぶことができ、また地域についても知ることができました。国家試験で介護系の問題が出たりしますが、「あーそういえば実習ではこうだったな」とわかることがあって助かっています。

実習にあたってお世話になった方々には本当に感謝しています。

次に、よくなかったことはいろいろとめんどくさいことがあるということです。月1回のゼミは、夏季実習に比して楽しいことはあまりなかったです。楽しめるほど積極的に参加していなかったのかもしれません。

また、県庁に「もし奨学金を返還するとしたら総額いくらになるのか」を電話で問い合わせたところ、折り返すと言われて1週間放置された挙句に県庁に呼び出されての面談と相成りました。しかも回答が用意されていないというサプライズ付きでした。

そして、これを書いている今は国家試験直前の2019年1月30日です。9月くらいから言われていたらしいのですが、きっと卒業試験で頭がいっぱいだったのでしょう。すっかり忘れていました。忘れたままでいられたらよかったのですが、そうは問屋が卸しません。催促のメールが容赦なく送られてきます。おかげでいい気分転換になりました。

みなさん、勉強も何事も計画的にやりましょう。